御紹介

ジェレミー　一幼兒の生ひ立

小主人公ジェレミーは七歳から八歳になつた。八歳になつたその日の朝、自分はやつぱり昨日と同じジェレミーでちつとも變つてゐないといふ事を知つてひどく落膽するところからこの物語は始つてゐる。

牧師で敎區長をしてゐる忙しい父親と、溫和で福々しくて、何事にも心を亂された事の無い母親と姉や妹と、叔父さん叔母さん、そういふ家庭に育てられた。

彼が始めて學校に行かうとする前の數週間は生涯の中で最初のほんたうの獨立生活の豫想で雄々しく振舞つてゐた。それ迄の間にいろ〳〵の事がある。例へば世間知らずで癇癪持ちのばあやとの別れ、これに代つて傭はれて來た家庭敎師對子供達とのいきさつ、ジェレミーが英雄と思つた船長が海賊の頭であつたこと等々。その中色刷のポスターで、町へ曲馬團や芝居のかゝる廣告が出た時彼はそれを見ないわけにはゆかなくなつた。貯金箱の蓋をあけた。そしてたう〳〵馬に乘つて見た。この事がお父さんに知れたが、その場面があんまり敎化的で無かつたので、折かくのお父さんの正しい心はちつとも息子の心に觸れることは出來なかつた。その中たう〳〵學校にはいる爲に家族のみんなとお別れをする時が來て、いつでも落ちついてゐて、彼の思つてゐる事をちやんと察して適當に振まつてゐるお母さんとの別れは一番つらく感じた。

かういふ筋である。

この作者英國のウォルポールは好んで少年の物語をかいてゐた、そして事實その小說は自分の少年時代を反映したものが多いといふ、ジェレミーこの少年物語も正直で眞面目な子供の心と鋭敏な神經の働をを前述のようないろ〳〵の出來事にことよせて、面白く示してゐる。かうした幼い者の眼に映る大人の姿がどんなものであるかを卒直にかいてゐるので、すつかり忘れてしまつた幼年時代のこゝろ持ちが甦つてきたように思つてよみ終つた。

ウォルギール作　一、三〇
西田琴譯　岩波書店

ケイティー　一少女の家庭生活

十二歳になる少女の家庭生活を、それもある短い期間の描寫であつて、出てくる人物の心持や態度などからその少女の全貌を描き出すと云つたふうに讀まれる。生ひ立ちとか思ひ出とかいつたものとは多少違つてゐるようである。

少女の父は醫者、兄弟は四人、母は天死してしまつて、イージー叔母さんがみんなの身の廻りの世話をする、といつた家庭。一篇の主となつてゐる點は、道德觀の養はれてゆくことで、それをケイティーがいろ〳〵の出來事の中で知らず〳〵感じたり養はれたりしてゆく過程をうまくとり込めてゐる。

父はイージー叔母さん任せではあるが、忙しい家業のひまに一寸歸つて來た時に、又來客のあつた時などに折々子供達と一緒

になる。いつも溫くて寛大なこゝろで子供等に接してゐるが、父の言葉は、知らず〳〵そう從はないでは居られない正しさを持つてケイティーの心に觸れていつた。叔母さんのいふ言は、一寸聞きたくないやうな誡しめが含まれてゐるので、折々子供達との間に葛籐を起すことがあるが、そのいふ通りに行はないと實際では困ることを屢く經驗するので、しまひにこの叔母さんが亡くなつてしまつて大變みんなが後悔する。

この間に子供らしいいたづらが度々行はれたり、ケイティー自身も一寸した不注意で長い病氣をしたり、いろんな目にあつてからその上で、少女らしい分別が自分の力から出てくるようになる、例へば、或るいたづらの自白を迫られた、そうしてほんとうの事を云つた、「今迄よりも一層恥しい思をして、でも何かしらホッとして席につきました。本當の事の中には何かホッとさせるようなものがあつて、一番困つてゐる時でもそれが本當を云ふ人を助けてくれます。ケイティーはこの事を今知りました」といつたようなことがところ〴〵に示されてゐる。

作者はあめりかのスーザンクリッヂ、數ある作品の中の代表作である。

クーリッヂ作　一、二〇
尾高京子譯　岩波書店

一老人の幼兒の追憶

ドイツの畫家が自分の幼少時を書いた自敍傳である。

いろ〳〵の出來事が澤山に出てくるので、こゝにどれをとり出してといふ代表的な部分を拔き書きするのが困難であるが、滿三歲頃から記憶がはつきりして來たその中で、母の事が屢く出てくる。良妻賢母の母に世話されるのを幼い頃から非常に喜び、母は又、めつたに罰しないで、惡かつたと自ら思はせるように常に導いてゐた。

時代が丁度十九世紀の初め、あのナポレオンの世界的事件の最中であつたから、著者が戰ひの渦中に居て、家に兵士が泊つたり、町に兵士が行軍したり、武器が相つで送られたり、それらを目擊してゐて大人の見方とは一向お構ひなしに、思つたまゝの記述が終りの方に大分精しい。從つて背景によつてわれわれが西洋史では習はなかつた興味ある事實をはからずも知つたわけであるが、それよりも、幼少者の心にそれらの事實が如何に觸れていつたかを知つたのは最も大きな收獲といつてもよいと思はれる。

この書がすでに明治四十四年に出版されてゐたものであつて、今度かうした事變時に於いて普及版になつたその意圖から暗示されたといふ感が深い。

キューゲルゲン著　四〇
伊原元治　田中耕太郎
大澤章　上野勳譯　岩波書店